

修士論文（要旨）

2009年1月

英語名詞における数の概念と表現

指導 小池一夫 教授

国際学研究科
言語教育専攻

207J4013

早坂有未

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 序論 | 1 |
| 1. 日英語間では数表現にどのような違いが見られるか | 3 |
| 1. 1. 日本語の名詞 | 3 |
| 1. 2. 数を表す表現に関する用語 | 6 |
| 1. 3. 類別詞の機能 | 8 |
| 2. 英語名詞の種類と用法 | 11 |
| 2. 1. 普通名詞 | 11 |
| 2. 2. 集合名詞 | 12 |
| 2. 3. 物質名詞 | 14 |
| 2. 4. 抽象名詞 | 15 |
| 2. 5. 固有名詞 | 15 |
| 3. 英語名詞の可算性・不可算性 | 17 |
| 3. 1. 可算名詞 | 17 |
| 3. 2. 不可算名詞 | 18 |
| 3. 3. ひとつの語が持つ可算と不可算の用法 | 18 |
| 3. 4. 数えられない名詞を数える方法 | 20 |
| 3. 5. 数えるための用法 | 22 |
| 4. 可算・不可算基準とは何か | 24 |
| 4. 1. 日英の名詞の個別性 | 24 |
| 4. 2. 特徴的な輪郭の基準 | 26 |
| 4. 3. 「数えられない」という考え方の基準 | 28 |
| 結論 | 32 |
| 注釈 | 34 |
| 参考文献 | 35 |
| 謝辞 | |

要旨

日本語と英語の違いのひとつに、英語名詞は数の概念を持っていることが挙げられる。日本語母語話者にとって、英語名詞が持つ数の概念は理解することが困難な事柄であるといえるだろう。たとえば、日本語ではパン1個、または1本のように数えることができるが、**bread**は不可算名詞（「数えられない」名詞）であるため **a bread** や **two breads** といった表現はできない。一見すると同じものを対象物としていると考えられる日本語の「パン」と英語の **bread** では、なぜ「数えられる」という捉え方に違いが生じるのか探ってみたい。

本論文では英語の数え方と比較するために日本語の名詞の数え方についても取り扱う。日本語の名詞は、単独で用いられる際は数の概念が伴っておらず、数を明示するには「りんごを3個食べた」「2人の学生」「本4冊」のように、類別詞を用いた表現で表わす必要がある。日本語における類別詞にはその名詞がどのような性質を持っているかを示す「範疇化」の機能と、その名詞の最小単位を表わす「個別化」の機能がある。類別詞の持つこの2つの機能のうち、名詞の対象を数え上げる際に用いられるのは「個別化」の機能である。「個別化」の機能によって日本語が名詞の数をどのように認識しているのかを明らかにしていく。

英語の名詞は一般的な学校文法においては普通名詞、集合名詞、物質名詞、抽象名詞、固有名詞の5つに分類される。それらはさらに可算名詞、不可算名詞に分けられるが、本論文中では不可算名詞、その中でも主に物質名詞に焦点を絞り、何を基準として「数えられない」とされているのか、また、通常不可算であるとされる物質名詞に数の概念が付与される時にはどのような言語的手段が用いられているのか言及していきたい。

通常不可算名詞とされる物質名詞と抽象名詞はどちらも「数えられない」名詞であるが、実物が存在するが「数えられない」物質名詞と、実物が存在しないため「数えられない」抽象名詞は、同じ「数えられない」という表現を使用しているものの、その性質が異なっているように思われる。このことから不可算名詞として扱われる語は、「数えられない」という観点から更に細かい分類ができるのではないかと仮定し、「数えられない」とみなされる基準について考察していく。

また、同じく物質名詞に関してピーターセン(2008)の『日本人の英語』の中で記述されている、可算不可算について述べる際によく引用される‘**Last night, I ate a chicken in the backyard.**’という文をもとに、**a chicken** と **chicken** の違いについて考察している。「鶏」を対象物とする **a chicken** が「鶏肉」を意味する **chicken** に変化する現象について、安井(1997)で記述されている「可算名詞が不可算名詞化する、きわめて一般的な現象の一つに、『食物化』ということがある」という考えを参考に、可算名詞がどのように認識されることによって不可算名詞として扱われるようになるのか、その基準を明らかにしたい。

そして、英語の名詞が可算名詞であることの基準として「特徴的な輪郭・境界線」という表現がよく用いられるが、この「特徴的な輪郭・境界線」という表現は名詞が数えられると認識されることに対する適切な表現といえるのか、可算名詞がどのような用法をもって「数えられる」名詞であるかという観点から考察を行う。

参考文献

- 阿戸昌彦 (2006) 「不定冠詞と複数形名詞の共起に関する一考察」『文教大学文学部紀要』(第 19-2 号) 文教大学, 1-17.
- Aikhenvald, Y. Alexandra. (2000). *Classifiers A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford: Oxford University Press.
- 安藤貞雄 (1987) 『英語の論理・日本語の論理』(第 3 版) 東京: 大修館書店.
- 浅見吏郎 (2006) 「日英語間の複数表現—名詞にどのように関わるか—」『札幌大学総合論叢』(第 22 号) 札幌大学, 15-32.
- Cruse, Alan. (2006). *A Glossary of Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 江川泰一郎 (1992) 『英文法解説』(改訂 3 版) 東京: 金子書房.
- 飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 (編) (2007) 『日本語学研究事典』東京: 明治書院.
- 久野暲・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法—冠詞と名詞』東京: くろしお出版.
- Huddleston, Rodney. & Geoffrey k. Pullum. (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今井むつみ (2008) 「事物の認識の普遍性と言語、文化の影響」長谷川寿一・C, ラマール・伊藤たかね編『こころと言葉 進化と認知科学のアプローチ』東京: 東京大学出版会, 191-210.
- 今里典子 (2004) 「非類別詞／類別詞言語を決定する要因について」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対象 シリーズ言語対象〈外から見る日本語〉』(第 3 巻) 東京: 大修館書店, 39-77.
- 井上京子 (1999) 「助数詞は何のためにあるのか」『言語』(第 28 巻 10 号) 東京: 大修館書店, 30-37.
- Jespersen, Otto. (1961) . *A Modern English Grammar on Historical Principles, part II Syntax*. (Vol. 1.). London: George Allen & Unwin. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京: 三省堂.
- 勝村満 (1966) 「英語名詞の複数形について」『北星論集』(3 巻) 北星大学, 58-81.
- 岸本映子 (2007) 「わかりやすい名詞の〈数〉と冠詞の指導—入門期の学習者への導入(1) 認知文法による授業の基本的枠組み」『英語教育』(第 55 巻) (第 12 号) 東京: 大修館書店, 52-55.
- 小池一夫 (2006) 『英語語彙の意味と構造』東京: 日本英語言語学研究推進會.
- 松井秀親 (2000) 「可算・不可算名詞を学生にいかにかに教えるか—学生の誤りから考える」『山形県立米沢女子短期大学紀要』(第 35 号) 山形県立米沢女子短期大学, 23-34.
- 水口志乃扶 (2004a) 『『類別詞』とは何か』西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対象 シリーズ言語対象〈外から見る日本語〉』(第 3 巻) 東京: 大修館書店, 3-22.
- 水口志乃扶 (2004b) 「日本語類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対象 シリーズ言語対象〈外から見る日本語〉』(第 3 巻) 東京: 大修館書店, 61-77.
- 西田一弘 (2005) 「英語における抽象名詞・普通名詞の分類に関する問題点」『愛知産業大

- 学短期大学紀要』(第 18 号) 愛知産業大学短期大学, 143-162.
- 西岡透 (2000) 『英語は冠詞だ』 東京: 開拓社.
- 野村益寛 (2005) 「可算名詞と不可算名詞の考え方」『英語教育』(第 54 巻 第 7 号) 東京: 大修館書店, 13-15.
- 織田稔 (2005) 「不定冠詞 a/an と定冠詞 the の表す世界」『英語教育』(第 54 巻 第 7 号) 東京: 大修館書店, 18-20.
- 織田稔 (2007) 『英語表現構造の基礎—冠詞と名詞・動詞と文表現・文型と文構造—』 東京: 風間書房.
- 大塚高信・中島文雄 (1982) 『新英語学辞典』 東京: 研究社.
- ピーターセン, マーク (2008) 『日本人の英語』 東京: 岩波書店.
- Quirk, Randolph. & Sidney, Greenbaum. (1995). *A Student's Grammar of English Language*. London: Longman.
- ラマール, C. (2008) 「言語変化と機能語」長谷川寿一・C, ラマール・伊藤たかね編『こころと言葉 進化と認知科学のアプローチ』 東京: 東京大学出版会, 63-77.
- 清水康行 (1999) 「日本語の数表現」『言語』(第 28 巻 第 10 号) 東京: 大修館書店, 42-47.
- 新村出 (編) (2005) 『広辞苑』(第 5 版) 東京: 岩波書店.
- 篠原俊吾 (1993) 「可算/不可算名詞の分類基準」『言語』(第 22 巻 第 10 号) 東京: 大修館書店. 44-49
- Sweet, Henry. (1968). *A New English Grammar: Logical and Historical*. Part I. Oxford: Clarendon Press.
- 高橋玄一郎 (1996) 「英語名詞の Grading—意味の程度性をめぐって*—」『活水論文集』(第 39 集) 活水女子大学・短期大学, 217-231.
- 高橋玄一郎 (1997) 「英語名詞の Grading (2)—判断基準と転化現象をめぐる覚え書き—」『活水論文』(第 40 集) 活水女子大学・短期大学, 145-156.
- 高橋玄一郎 (1998) 「Grading と英語名詞 (3)—可算/不可算の連続性と転化現象の再考察—」『活水論文集』(第 41 集) 活水女子大学・短期大学, 125-145.
- 内林政夫 (1999) 『数の民族誌—世界の数・日本の数—』 東京: 八坂書房.
- 宇都宮裕章 (1995) 「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』(第 87 号) 東京: 日本語教育学会, 1-11.
- 安井稔 (1997) 『英文法総覧』(改訂版) 東京: 開拓社.
- The British National Corpus http://scn02.corpora.jp/~sakura04/index_8unvlib.html (BNC)